

2011年3月11日の午後2時半すぎ。社会福祉法人 杜の里福祉会理事長の山崎和彦氏は、仙台市内のホテルの15階で、自身が率いる2つの法人の理事たちとの会合を終えたところだった。帰り支度に入ろうという矢先、突然、激しくあたりが揺れ始めた。すぐに大きな横揺れとなつてしばらく続き、収まるどころか尋常ではない大きさになっていく。

山崎理事長は、ビルの廊下や床がこれほど激しくたわんでいるのを、生まれて初めて目にした。コンクリートのひび割れる音を聴くことも、初めてだった。脳裏には、少し前に起こったニュージーランド地震のビル崩壊の映像が頭をよぎり、自分の人生もここで尽きてしまうのか、と観念しかけたという。

しばらくして揺れはやつと収まった。地上に戻ったところで避難場所を求めて走る大勢の人たちの姿を目にしているはずなのに、このあたりの記憶はすでに定かではない。余震がくり返される。しかし山崎理事長に、自身の安全を考えている暇はなかった。

社会福祉法人 杜の里福祉会は、2つの特別養護老人ホームとケアハウスを有する。会議には、「杜の里」(特養)から常務理事兼施設長、

「老いること」と「死ぬこと」の尊厳に向き合うために 81

津波被災のために 孤立した介護施設が、 なぜ1人の死者も出さなかったのか

社会福祉法人 杜の里福祉会(仙台市若林区)理事長・山崎和彦氏への取材より——その1

■ 佐藤 幹夫

事務局長、副施設長などの幹部職員が参加していたが、山崎理事長はその中の1人を「杜の里」に、もう1人を「二重の里」(特養)へすぐに戻らう命じた。そして自身が理事長を務めるもう1つの社会福祉法人である、成仁(会)(岩手県大船渡市)の理事たちと山崎シゲ氏を大船渡まで送り届けるために、車で向かうことにした(山崎シゲ氏は、東北地方でもっとも初期に開設した特別養護老人ホーム「富美岡荘」の創設者であり、和彦氏にとってシゲ氏は母親であるとともに、仕事上の手本であり、大きな目標でもあった)。

「杜の里」は仙台市若林区の三本塚を所在地とし、仙台湾に2000人から3000人の遺体が生かされていると報じられた荒浜地区の北西に位置していた。施設の建物は、海岸から2km弱の場所に建てられ、山崎理事長が仙台の地に「杜の里」を開設したのは1999年4月。ここを選ぶときに、津波襲来のは非を尋ねたところ、「一度もない」との答えだった。大船渡の施設では毎月一度、津波を想定した避難訓練や消火訓練を欠かさなかったから、そこでの教え通り仙台に移ってからにも訓練を実施して備えてきた。「まさか、あれほどの津波がやってくるとは、まったく考えていなかった。むしろ大船渡の『富美岡荘』のほうが、すでに40年ほど経っている建物です。大船渡は震度6強。建物は倒壊

し、そうとう悲惨な状況になっているだろう、と覚悟しました」

車を走らせてはみたが、東北自動車道はすでに通行止めになっていた。一般道も混雑が激しく、ほとんど進めない。「一重の里」がインターチェンジの近くだったので、そこに1泊し、翌朝一番に国道4号線を北上して、いつもは3時間で到着するところを7時間ほどかけてやっとたどり着いた。大船渡は津波にやられ、街の半数以上が壊滅状態だった。高台にあった施設はかろうじて難を逃れたが、みな絶句したまま声も出なかったという。

被災直後の「杜の里」

一方の「杜の里」は、完全な孤立状態に置かれていた。地震から45分後には3mの津波が到来し、1階部分がすべて泥と海水で埋め尽



東日本大震災が発生した3・11当日の様子を切々と語る社会福祉法人杜の里福祉会の山崎和彦理事長。

くされた。山崎理事長がやっと連絡が取れたのは数日後。しかし今度はガソリンが入手できなかったり、道路の整備も十分でなかったりして大船渡で足止めを食い、1週間にわたって、仙台に戻ることはできなかったという。「杜の里」の被災時とその後の様子が、以下のように記録に残されている。

- 14:46 大地震発生。停電のため、照明、暖房、給湯設備すべて停止。入居者の避難誘導開始。
- 15:01 特養1階入居者49名を2階へ避難完了。
- 15:11 ケアハウス利用者44名を特養2階へ避難完了（5名は外出中）。
- 15:21 役員会参加事務職員5名到着。
- 15:30 津波到来。地盤より3mまで達する。施設の1階部分が泥と海水により完全に埋まる。敷地内が海岸より押し寄せた樹木、瓦礫に埋め尽くされ、駐車していた自動車90台が浸水。近隣の自動車も押し流されてきた。

すぐに入居者・職員の安否確認がなされ、全員の無事が確かめられた。しかし、施設が孤立

し、電気・水道が停止したことも同時に判明した。食料、飲料、懐中電灯とラジオ、電池の残量などを確認し、外からの情報を得るため、携帯電話を使った連絡が試みられたが、ほぼ使用できない状態であることが明らかとなった。スタッフの所持品である1台のラジオだけが唯一の情報源だった。さらに記録より。

- この状況で数日を過ごすことが現実であると判断し、入居者の部屋割、トイレの使用方法等を全員で決定する。
- 自家発電を使用するために、事務所から屋上へ至るためのマスターキーと、自家発電盤の開閉キーを入手する。その後自家発電を起動するが、GC回路遮断が不完全なため、配電盤ショートによる発火発生。消火器を使用し鎮火するが、当日は自家発電の使用を控えることにする。

地震直後から、非情にも、雪が降り始めていた。「杜の里」入居者の平均介護度は「4・3」。「5」の人が50名おり、痰の吸引が常時必要な利用者もいる。暖房器具が使えないことに加え、布団、毛布などの寝具や衣類の数は限られており、十分な暖をとることができなくなった。利用者たちの体温が、あつという間に下が

り始めていく。食糧にも限りがある。

地震直後から、利用者ら200名の生命を守る壮絶な闘いが全職員によって始まった。

スタッフたちの記録から

法人にはスタッフたちの記した当日の様子が、貴重な資料として残っており、そのいくつかを紹介させていただく（スペースの都合で、断片的・部分的抜粋となること、文意を変えないように字句や句読点の補筆・訂正を加えている箇所があることをご了承ください）。

まず地震発生直後の状況。

《寮母コーナーからBユニットに向かう途中で地震があり、浴室の窓の前にいた利用者を窓から遠ざけようと駆け寄り、障害物のない廊下の真ん中に移動しました。その時点で歩くことすらままならないすごい揺れでした。車いすも揺れ、入居者が落ちるのではないかと、自分も動くことができず、その場にしゃがみこみ、車いすと入居者を抑え揺れが収まるのを待つのが精一杯でした。『大丈夫ですよ』と声をかけながら、気持ち落ち着かせようと必死でした。（略）いたるところからものが倒れる音、食器が割れる音が聞こえましたが、天井からの落下物はなく、Bユニットの職員が各居室のなかを確認しているのをただ見てい

ることしかできませんでした。（略）怪我をしている入居者はいませんでした。テレビやパソコン、食器棚等が倒れ、ガラスが散乱している状態で、タオルケットで覆い、危険のないようにと心がけました。《Nさん・女性》

自分自身の身を守ることをささ易くではない揺れのさなか、安全確認をして回ったり、入居者の安全確保を、体を張って守ろうとしているスタッフの姿が多く報告されている。利用者のなかには恐怖や不安を訴えるひとが少なくなかったし、2階3階のフロアは騒然とし、混乱状況にあった。

揺れが収まって間もなく、「津波が来る」という情報が流れた。先に示したように、津波到着まで約45分。「杜の里」の入居者150名のうち、1階の50名、ケアハウス「ハートフル仙



施設内は1階部分がすべて泥と海水で埋め尽くされたという。写真は被災直後の1階の様子。

台」の50名と、あわせて100名を2階にまで避難させなくてはならなかった。皆、津波が黒い塊となって襲ってくる時の恐怖と驚きを書き残している。

《次長が手にしていたラジオから大津波警報が発令され、事務職員と1階入居者を2階と3階に避難させることを決めた。階段で車椅子ごと運び、（障害の軽い入居者は（自分が）1人で担いで2階に避難させた。1階入居者全員の避難が終了。最後に1つずつ居室とトイレを確認した。Bユニットの居室内に、まだベッドに横になっている方が1名いた。確認を怠らずよかった。（略）

2階の交流スペースから外を眺めると、東側一帯に黒いものが動いていた。津波と理解はできるはずだが、目の前の光景が信じられず、津波と分かるまで数秒かかった。厨房の外ではS事務長、O課長、厨房の職員が歩いていた。

「津波が来たから早く逃げて」と大声で叫んだ。何が起きているのか分からない様子だったので、「すぐそばまで津波が来ている。逃げて下さい」と何度も叫んだ。O課長らが2階へ上がった直後、「杜の里」に黒い波が押し寄せた。

水位が少しずつ上がっていく感じだったので、初めは周りの入居者や職員と一緒に騒いでいた。どんどん水の勢いは増し、施設に駐車

していた車は1台ずつ簡単に流されていった。裏の駐車場に止めていた自分の車が流れていくのを、何もできずにただ眺めていた。

水の勢いは止まり、2階まで津波は到達しなかった。施設が津波に吞まれ、流されてしまったという最悪のケースは免れたが、ひどい状況に変わりはない。入居者の不安を解消するよう努めていると、再び水位が上がった。津波の第2波だ。2階に避難していた1階入居者を、今度は階段で3階に運んだ。10名ほど避難すると、すぐに水位は止まり、落ち着いた。今度こそ津波は止まった。外の景色はどこを見ても水浸しだ。施設は完全に孤立していた。《

(Tさん、男性)
もう1人。



現在、「杜の里」は津波の被害を免れた2階に事務所を移し、通常業務を行っている。写真は、津波の被害を受けた1階の旧事務所スペース。被災状況を説明する齋藤和男事務局長(右)とその話に耳を傾ける筆者(左)。

《揺れがおさまり、相談員や事務所職員がかけつけてくれました。キャビより、米やお菓子、食器等がとび出しており、その瞬間、何か大変なことが起きたんだと思い、足が震えて、止まりませんでした。すぐに津波が来るという情報があり、1階の入居者を2階へ…。私は2階に待機してベランダとユニットを歩き来していると、遠くに松の木が見え、その上に白い線が見えました。ユニットが気になって戻り、またベランダへ行くと、「杜の里」の東側のお寺まで黒い水が来て、車や瓦礫が次々に目の前を流れていきました。「杜の里」の目の前の集落から、老夫婦と犬1匹が走って逃げていました。思わず一緒にいた職員と「逃げてー」と大きな声で叫びました。津波は東部道路まで行き、走行中の車などもどんどん呑み込んでいきました。ユニットへ戻ると、水かさが増してきている、3階へ避難とのこと、歩ける方は3階へ移動開始。私は2階で見守りをしていました。見守り中、とても怖くて、このまま水かさが増してきたらここで死ぬのかな、などと考えていました》(Kさん、女性)

また別の職員は次のように記す。

《ふとフロアに目をやると、若い女性介護員が強い揺れに転びそうになりながらも、居室で休んでいる入居者に声をかけて走り回っていた。(略)S53・6月の宮城県沖以上のいま

まだにない激しい揺れに、これはただ事ではないとわかるが、心あらずの状態に陥り、足の踏み場もなくなったフロアにいて、津波が来るの考えも浮かばなかった。10分くらい過ぎたところに事務長が大声で「そんなことをしている場合でない、津波が来る。早く避難の準備だ!」と報告を受け、はつと我にかえり、入居者を、指示に従い誘導を始める。2階の窓より荒浜の方向に三本塚を見ると、遠くに土煙の山が何個か点在して見えてきた。あつ、これが津波だ、ここにも来ると思い「津波が来てるよ!」と大きな声を発するが、声がふるえて出ない。《(Sさん、女性)

この後も大きな余震は続いている。間もなく、長く、寒く、厳しい夜が到来する。体をさすったりしての保温、励まし、食事の介護、排泄、痰の吸引など、自身も恐怖と不安を抱えながらも、スタッフたちの懸命なケアはさらに続くことになる。お年寄りたちを1人も死なせてはならない。スタッフ全員がそう思った。

■さとう・みきお
フリージャーナリスト

養護学校教員を経て2001年からフリージャーナリストに転身。著書に「開症裁判」(朝日文庫)、「裁かれた罪、裁かれなかったこと」(17歳の自閉症裁判)(岩波現代文庫)、「自閉症の子たちをどう考えてきたか」(洋泉社)、「ルポ 高齢者医療 地域で支えるために」(岩波新書)など。近著に本連載が基となった「ルポ 認知症ケア最前線」(岩波新書)。共著は「刑法三九条は削除せよ」(是非が非か)、「少年犯罪厳罰化 私はどう考える」(いずれも洋泉社・新書)など。